

重要文化財 内田家住宅



■基本情報

指定年月日：昭和 46 年 6 月 22 日

所在地：秩父市^{まいた}蒔田 891 番地

指定内容：^{けたゆき}桁行 24.9m、^{はりま}梁間 11.1m、一部二階、^{いりも やぶくり}入母屋造、^{かやぶき}茅葺

■内田家の沿革

内田氏の祖先は藤田氏と名乗る北条氏家臣であったが、天正 18 年（1590）の^{はちがたじょう}鉢形城落城とともに現在の秩父市蒔田に帰農し、このときに姓を内田氏と改めたと伝えられる。

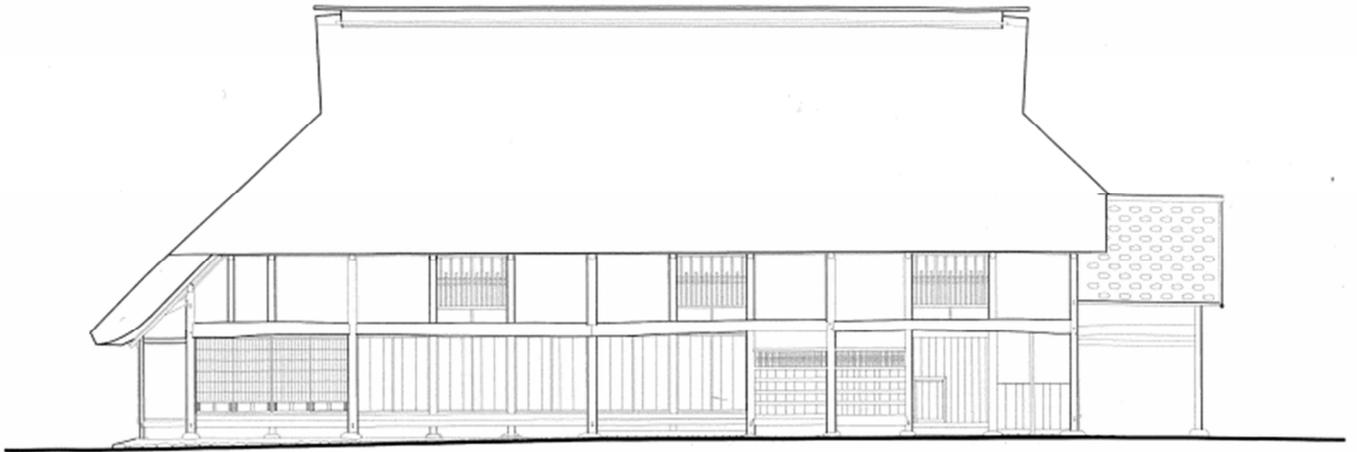
江戸時代の寛永年間以降は代々蒔田村の名主を勤め、村役人としての活動はもとより、用水・新田開発・養蚕等の産業振興において多大の功績を挙げたと記録に残されている。

特に養蚕については、蒔田村において寛永 8 年（1631）に年貢として絹を納めた記録が内田家に残る古文書にあり、古くから行われていたことがうかがわれ、幕末期をピークとして近年まで続いていた。

■内田家住宅の概要

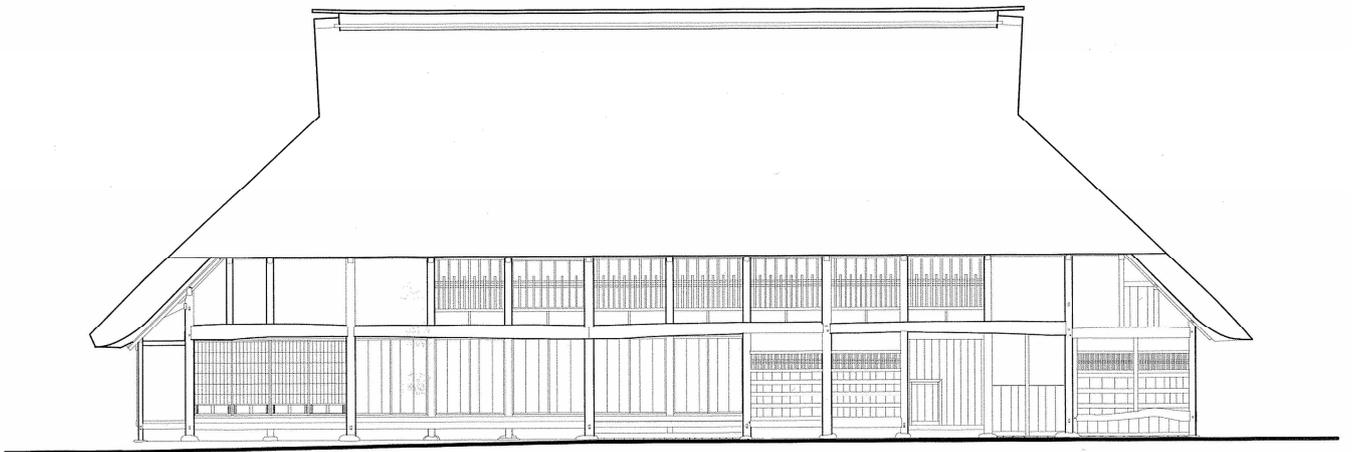
平成 25 年から平成 28 年にかけて行われた保存修理事業により発見された、^{きとう}祈祷札の銘文や文書の調査により、建設年代は享保 16 年（1731）であることが判明した。また、使われていない痕跡や、文書、言い伝えから、建築部材の一部は下田野村（皆野町）から移築されてきた事も判明した。

建物は入母屋造で、茅葺の屋根の表側を切り上げ養蚕に使うため、中二階の通風・採光を計っている。内部は東よりウマヤ、デエドコ（土間）床を張ったザシキ、その上手は畳敷きのデエ・ナカンデエ・オクリノデエの三室が L 字型に配置される三室座敷^{ざしき}となり、ヘーヤ（寝室）がある。^{さんまどりひろまがた}三間取広間型系統の間取りである。二階は建物の前半部と後半部はヘーヤに設け、ザシキ・土間は吹き抜け、ナカンデエ・オクリノデエは天井裏とする。



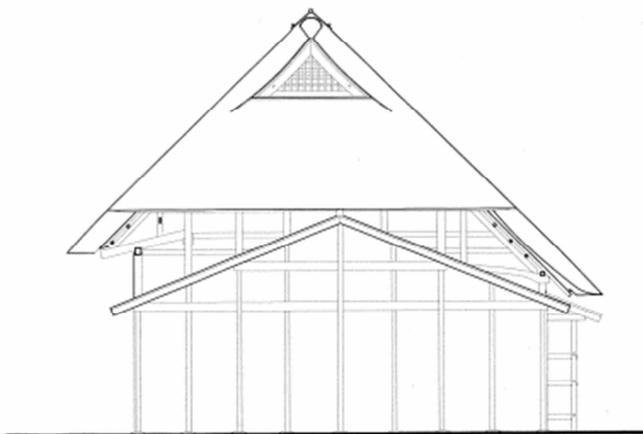
正面図：享保 16 年

ウマヤは切妻造、二階窓は 3 か所



正面図：幕末以降
(平成 28 年復原)

ウマヤは屋根を身舎に取り込む、二階窓を 4 か所増設

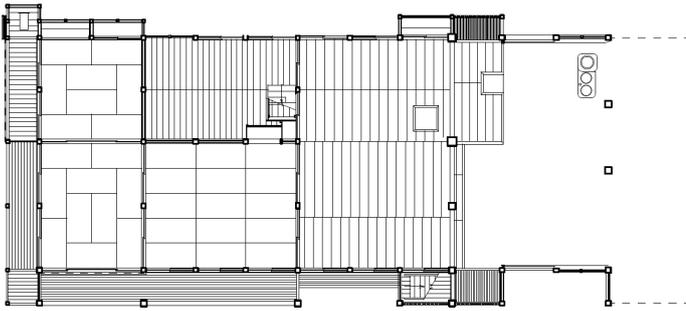


東側面図：当初



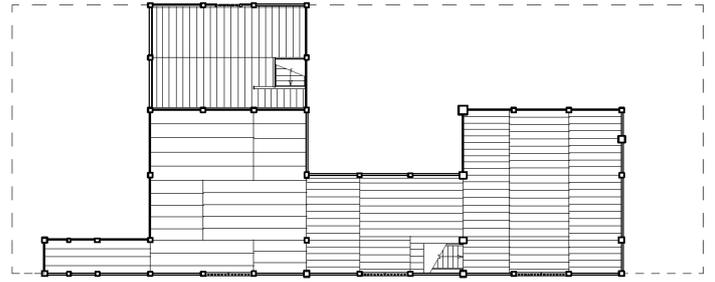
幕末以降 (平成 28 年復原)

内田家住宅の変遷



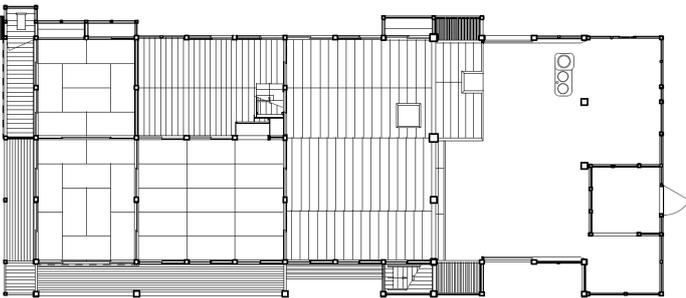
当初（享保 16 年・1731）

ウマヤ部分は推定、ダイドコロ・ヒジロ、オクリノデイ縁側が大きく変わる。



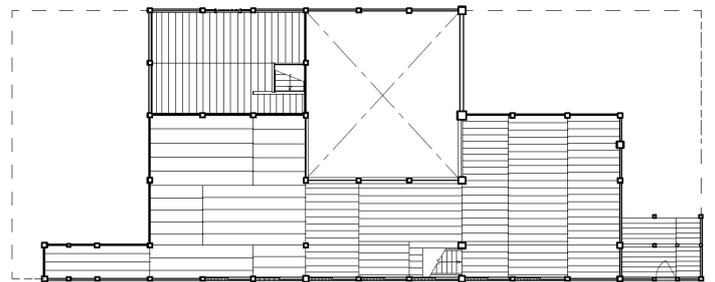
当初（享保 16 年・1731）

正面窓は 3 か所、ザシキ上部は土壁で仕切る。



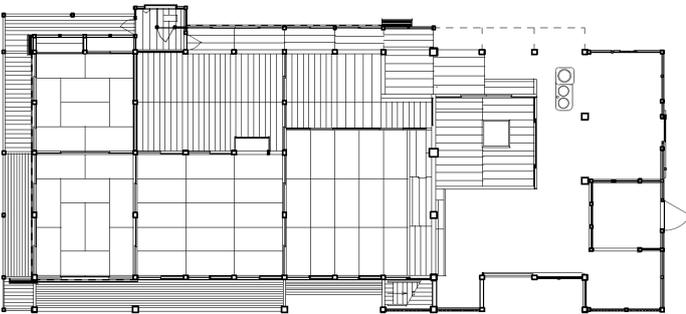
幕末期（平成 28 年復原）

ウマヤの改築。デイ・ヘーヤ境の壁を撤去、板戸とする。



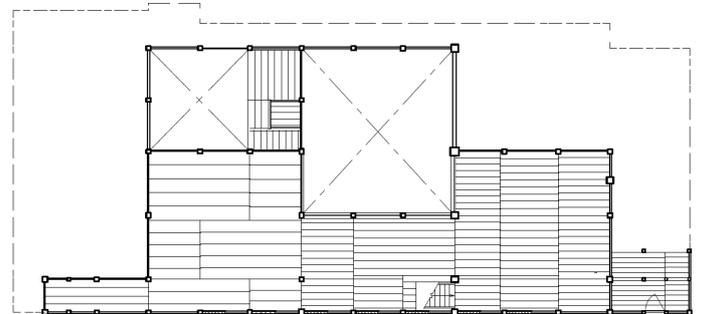
幕末期（平成 28 年復原）

正面窓は 7 か所、ザシキ上部壁を撤去、吹き抜け。



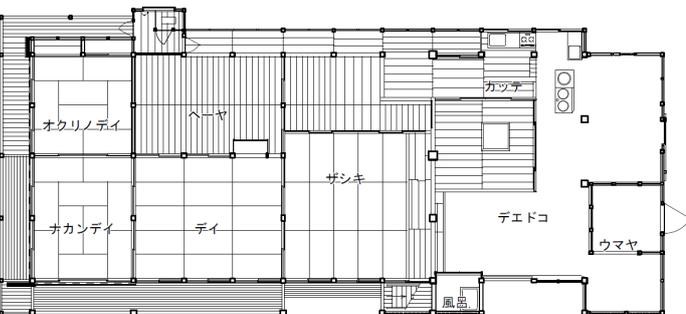
明治期

ダイドコロ・ヒジロの拡張、ヘーヤ・背面に縁側廊下を設け上便所の位置を変える。



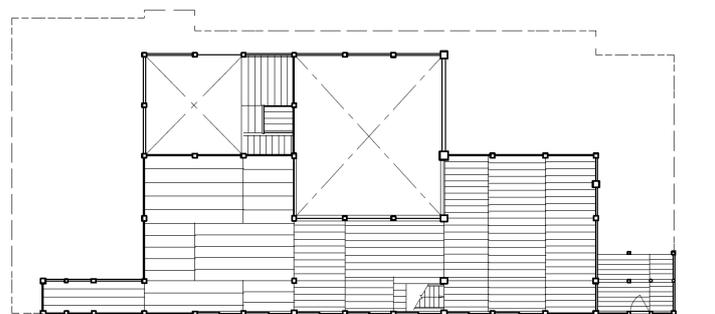
明治期

現状の通り。ヘーヤ二階床を 2/3 撤去。



昭和～平成 25 年

ダイドコロ流し・風呂の設備改造、カマドレンガ造、ウマヤ東側に出入口新設。



昭和～平成 25 年

■建物の特徴、先進性

内田家の最も特徴とするところは、入母屋造の屋根の正面側を切り上げてせがい軒、開口窓とし、本格的な二階を設けていることであり、建物の規模も大きい。江戸後期以降の関東地方ではこのような形式の建物が多く建てられるが、江戸中期（1731年）としては先進的であり、建築史を覆すような事例となった。古い要素としては、ほぼ1間毎（1.8m）に柱が立ち、柱や梁の木割も太くドマ側はチョウナ肌で仕上げられている。一方、新しい要素としては、出入口開口の一部を1.5～2間（2.7～3.6m）として、鴨居より大きい差物を使用して広く取る他、ザシキからオクリノデエまでは柱や造作類はカンナで仕上げられている。

建物の用途としては居住空間、養蚕のために広い空間を必要としたため、二階造にして正面に窓を設け、採光・通風が計られている。また村役人（名主）として代官の宿舎対応施設としての機能も備えられており、特にオクリノデエは床の間、上便所等を備えて格付けがなされている。

■使用材料・適材適所

当建物では数種類の木材が特性に合わせて計画的に使用されている。柱はクリ・ケヤキ、梁・小屋束はマツ・クリ材、造作材はマツ・シオジ・スギ・モミ材を主に使用している。

- ・マツは直径が太く粘りがあるので梁などの横架材、板材には向いているが、湿気に弱いので床材、曲がりくねって育つので柱などの直線材には向かない。
- ・ケヤキは太く大きく育ち、非常に硬いので大黒柱と一部の柱に使われている。
- ・クリは太く湿気に強く丈夫なので土台、柱に使われている。曲がりくねって育つがウマヤではわざとそのような柱を使っている。（みすばらしく見せるため？）
- ・スギはまっすぐ育つので板材、造作材に使用される。
- ・シオジは太く育つので板や大径材に使用されているが、曲がって育つためか2m以上の長い材料はない。木目に特徴がありデエ・ヘーヤで多く使われている。

■現状変更：建物の復原

平成25年から平成28年にかけて実施した保存修理事業による解体を伴う調査によって、内田家住宅は建立後、300年が経過しているにもかかわらず、ほぼ当初からの姿を保っていることが判明した。一方で、生活様式の変化に伴い部分的に後世の改造が行われている部分も見受けられた。特に明治～昭和期に行われた改造による新しい増築部分、ガラス窓・サッシ等の建具類、近代的なステンレスの流し、風呂などは、江戸時代の養蚕農家という文化財としての価値とはかけ離れそぐわないと考えられた。そこで内田家住宅においては江戸時代末期の養蚕最盛期の姿に復原した。

復原概要は以下の通りである。

- ・明治時代期に背面に取り付けられた廊下・便所・流しの撤去
- ・土間の背面大戸口、ジロバタ、風呂場の復原、レンガ製竈を土製に復旧
- ・土間に流し、ザシキに戸棚を復原
- ・ザシキの間仕切の撤去、囲炉裏の復原
- ・ヘーヤの二階の復元、階段・戸棚の復原
- ・西縁に上便所を復原
- ・その他、失われた建具、新建材などの撤去復旧